

答えと解説

さて、全部見つけれられたかな？ 探してるうちに、同じようなモチーフ*がたくさん登場することに気がついたでしょう。つまり、それだけアンソールにとって大切なモチーフだったということなんですね。では、答えと解説を読んでみましょう。

*モチーフ・・・小説・音楽・絵画などを作るきっかけになった中心的なもの。

アンソールはふるさとのオーステンドが大好きだったので、彼はオーステンドのまわりの絵をたくさんかきました。マリアケルクというのはオーステンドの南西3kmにある村の名前で、なかでも彼はここにある14世紀の教会を好んで描いたのです。

1

「マリアケルクの眺望」

作品番号18,19 <風景・海景・街路・建築物>

ここに描かれているのは、100歳のアンソール像です。アンソールの作品にはがい骨のモチーフがよくみられますね。それは1887年にお父さんが死んだことや、自分自身が大きな病気にかかって、死にそうになった事があるからかもしれません。

3

「1960年の自画像」

作品番号2 <自画像>

アンソールは自分自身の顔をなんどもなんどもくり返し見つめ、たくさんの自画像をかきました。よく見ると、この自画像では、アンソールの顔の上にかい骨がかさなってかかれていますね。この他の作品にもこのような、自分をひにくった表現をすることがよくあります。若いころのアンソールは昔からの芸術と違った絵を描いたり、人間のきたない部分をしげきするようなモチーフを選んだので、同じ時代の作家からもあいてにされませんでした。こうしたひにくった表現をつかうのは、彼自身が自分の事を「迫害*される芸術家」だと思っていたからではないでしょうか。

2

「骸骨になった私」

作品番号3 <自画像>

*迫害…弱い立場にある人をきびしくおさえつけて苦しめること。

4

アンソールにとって、宗教をあつかった絵の中でいちばん大事なことがあったのがキリストでした。彼は他の作家たちに認められない芸術家としての自分を、キリストの受難*と復活の物語に置きかえようとしたのです。そのためか、アンソールは自らとキリストを重ねあわせて表現することが多いようです。

*キリストの受難・・・キリスト教でキリストが捕らえられて十字架にかけられたこと。

「キリスト、魚をふやしたまう」

作品番号76、77 <宗教主題>

1880年代はアンソールの生まれた国であるベルギーが変わろうとしていたときでした。アンソールは諷刺*する作品を描くようになりました。この絵は、そのころのベルギーのえらい人たちのうちやおしっこを国民が「食べるもの」としてうけとめているところです。これは彼のスカトロジカル*な表現の中でもいちばん過激なもののひとつです。しかし、アンソールにとってこうしたスカトロジカルな表現は、諷刺をするために必要な方法としてだけでなく、人間のありのままの姿をそのままかくことによって、絵を見る者に人間というものについて深く考えてほしかったのではないのでしょうか。

*諷刺（ふうし）…社会や人物に対して、直接悪口を言うのではなく、作品の表現などを通して、遠回しにうたえかけること。※スカトロジカル…汚い物をめぐる話。世界各地の神話や文学作品にみられる。

「純理派の食糧供給」

作品番号139 <諷刺・風俗・歴史など>

この絵では、たくさんの人たちの上に死神をかくことによって、人間は死というものからどうしても逃げる事ができないという、おそろしさを表現しようとしています。アンソールはこの絵のほかにも、たくさんの人がとうじょうする絵をかいていますが、それは、そのころのベルギーでおこっていた世の中を変えようとする運動ととても関係があったようです。彼の絵の中にかかれたおおぜいの人々をよく見ると、いろいろな身分の人たちがいたり、いろいろな顔をした人たちがいますね。まるで人間がたくさんのアリののように、集まってざわざわしているような表現からは、普通ではないパワーが感じられませんか。

6

「人間の群れを狩り出す死」

作品番号112 <幻想とグロテスク>